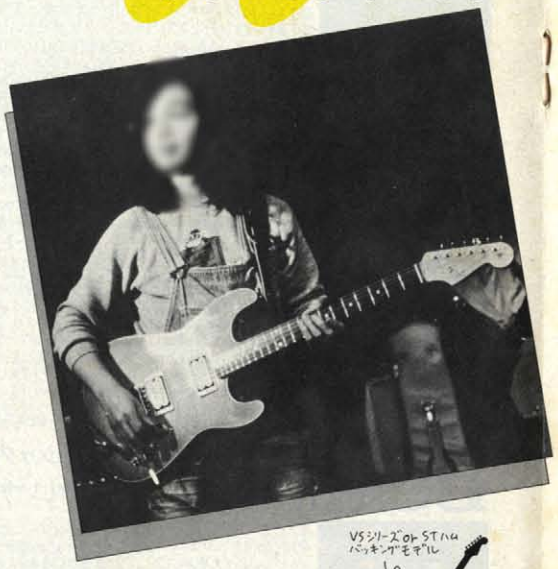
一流ギタリストをめざす人のための サウンド徹底研究！

〔第1回〕小川銀次のスーパーサウンドクリニック

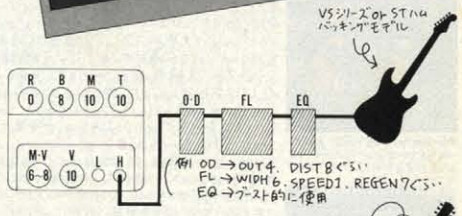
〈プロローグ ―― ごあいさつ〉

エーコンニチワ！小川銀次です。何故かという感じでスーパーギタリストたちのサウンドクリニックをいたすことにあいなりました。ウ、ゲーゼンにもトーカイのVS-100を改造したヤツとTA-35・OCを2台ステレオで使っているということもあって依頼された訳で世界のスーパースターと同じサウンド、はたまたそれを基本に自分のオリジナルサウンドを出したいと頑張っている悩み多き全国のギターキッズのためにバリでも役に立てばといきうけたしだいです。それではメイッパイキバッテいきたいと思います。ご注意してほしいのは、あくまでもここでは彼らの一番ノーマルなサウンドを軸に、アンプのセッティング方法（チューニング）をメインにしているので、エフェクターの使い方に関してはエフェクターのメーカーによっても若干異なってくるので自分なりに研究してみてほしい。一応、自分のエフェクターの目盛りを参考までに記しておく。● TA-35・OCの特長／では本題に入るまえにこの問題アのアンプ――TA-35・OCについて少し話してみようかナ。まずこのアンプ。ビックリしたのは「リトル・ジャイアンツ」という感じで小さい割に音がデカ！ 少したたせ音がデカイというだけではなく、しっかりしていて腰の強い太い音を出すんだヨネ。それに生音（ナマオト）が良いなのにはビックリ！ んでもってフィードバックもしっかりするし、トランジスタアンプの欠点にはあまたかく倍音がよく鳴るというのが第一印象だナ。ただクセとしてディストーションの場合、倍音が強いからブライトさがどうしても originalなくなってしまう。でもメリハリの強いディストーションサウンドがほしい時は逆に Vol を少しだけおとしてインコイジングでその分補正してやるといいみたい。で、この価格でこのパワー、リバーブまでついているし、何たってルックスがイカスヨネ。本当の織りを使ったツイードクロスはモチロンとトーカイだけだっていうから、それに準拠メイプルでエンクロージュアがジョイントロック方まで組まれているから当然音もしっかりしているし……。この価格でこんなせいたくな作りをしているところなんて今時まずないんじゃない。今度 60 W クラスも出るという事で、今から楽しみにしているんだヨネ。



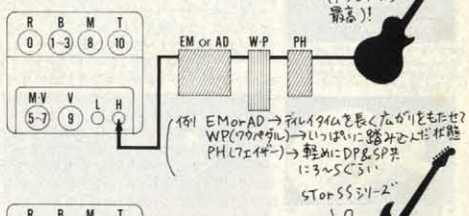
①ヴァン・ヘイレン風サウンドに挑戦

この人、若いのに毎回新しいアルバムを出す度に新しいワザをといいる努力をしているのがエライ。ライトハンド奏法ってもハービー・マンデルというお方が ずい分前に日本に来た時すでにやっていたけど、せっぱり世界的にポピュラーにしたのがひかる君ネ。サウンドの特徴としてはフランジャーの使い方が独特なのと、イコライザーをブースト的に使用しふ厚い音づくりをしていること。奏法的にもあの話題のライトハンド奏法はもちろん、最近アームの使い方がグッと色っぽく、アンニュイルワーズ的になってきた。テクニックは相当なもので、せはり自分にしか出来ないものをという事で研究していると思う。セッティング例は次のとおりで、特にフランジャーは1フレーズごとにリフる時、ブーストSWできたり入れたりすると面白じがでる。



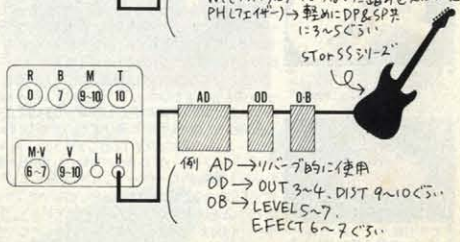
②ジミー・ペイジ風サウンドに挑戦

ロック史上、最高のパフォーマンススケールのデカサが魅力のツェッペリン。その頭になりうるだけの要素と魅力をもっているロックのシンボルだヨネ、ペイジは。もう太型アンプとハムバッカーの組み合わせで攻撃的なサウンドが最大の魅力だが反共に特徴。エコーマシンはディレイ、ワウペダル、そしてフェイザーと次の様なセッティングにすればほぼパーフェクト。後にエキショナルだし、これからも頑張ってほしいギタリストだ。当然トラモクスタンダードを使くがまえとキメればいい事なんだネ。



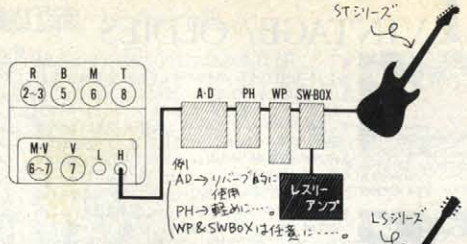
③ジェフ・ベック風サウンドに挑戦

僕はベックについては更に期えないで、もっとギターに燃えてほしいと思う。ベックは天才だから他人に刺激をうけるとギターを手にする例が多い。たとえば、ヤン・ハマー、S・クラーク、G・フィリップス、そしてマッキン・ローションなど、本にまわりにすごい人きがいればもっともっと超絶のテクニックを見せてくれるんじゃないかナ。ギターそのものがもっているサウンドを真直に使うし、独特なチューニングもあまりしていないみたいだし、とに角サウンドの特徴はシングルでもハムバッキングでもその最高の音を出す。フィードバックもこのアンプなら OK！ ディレイはリバーブ的に使用、セッティングは次のとおり。



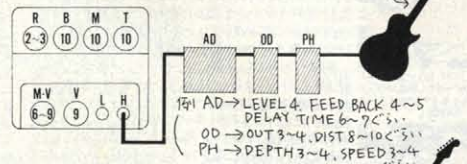
④エリック・クラプトン風サウンドに挑戦

スローハンドの代名詞クラプトン。基本的にはオーソドックスなタイプを保ち続けている。あと何年かでキングの様な存在になるだろうネ。ベック同様どんなギターでもすばらしいサウンドが出せるというのが特徴？ ホットでそれでいて繊細、ウーマントーン、ハーフトーン等ギターバみマーとしても素晴らしい。エフェクターはすべて軽めでディレイもリバーブ的な使い方が多い。レイドバックしたサウンドがたまらないネ。STシリーズとTA-35・OCはまさに彼のための組み合わせだネ。



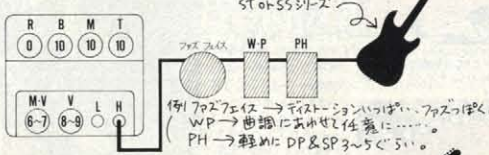
⑤ジョー・ウォルシュ風サウンドに挑戦

ジョー・ウォルシュは本当にナチュラルサウンドの名人だ。実際のセッティングもほとんど"エコーマシンを使用する以外、ダイレクトにアタインして あの様な暖かい、ぜのあるキラメキサウンド"を出せるから不思議だ。「ホテル・カリフォルニア」があまりにも有名だけど、バーンストーム時代や最近のVJD活動でもヒット曲を放っているだけに今ぜアメリカでは最高の人気ギタリストだ。LS1005とTA-35・OC、これまたグッドコンビ。ディレイとディストーション、そしてフェイザーその組み合わせでキマリだネ。ここでは特に名曲「ホテル・カリフォルニア」のソロにせまってみよう。それもライヴのね。



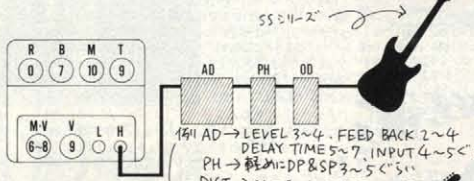
⑥ジミー・ヘンドリックス風サウンドに挑戦

今はたき天才ギタリスト。この人の影響をうけないギタリストはいない位、歴史をかえた偉大なるギタリスト。リードプレイをしながらうたうなんてのは朝メシ前で、テクニック的にも早弾から独特のアーミング、歯でひくというところまで開発してしまった。あらゆる面でその影響力はすさまじい。驚異のもう機能を100%前面にあらし出したお に強度のギターパフォーマー だ。ルイモがジミ・ヘンサウンドのセッティング例。ディストーションはファズっぽく、サスティンも充分きかせてパワフルにせめればもう鍛冶ダネ。



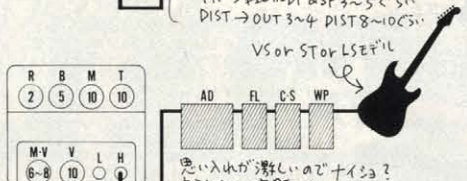
⑦ヘヴィメタルキング R.B. サウンドに挑戦

最近のギターキッズの R.B. への思い入れは相当のものらしく、ヘヴィメタル、ハードロックのダイコさを彼が"投きあげたようなものだからかよう様な気もするネ。スレートで"スピーディーな展開が魅力なだけに、シャープで"華やかのあるシングルコイルサウンドが出ればもうしめたもの。それにはこのヴィーサタイルなアンプTA-35・OCが最適だし、最近は色々な雑誌でサウンドクリニックがあって音の創りかも示されているだけにみんなの方がもっと詳しいがもネ。



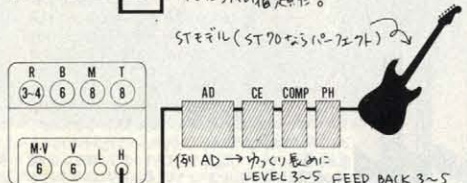
⑧ゲイリー・ムーア風サウンドに挑戦

もう彼については何も言えないという感じ。今ぜイギリスでは神話的な存在だし、何となく自分も少っと入れかえてみたりする位他人とは思えない。弾き出したら止まらないところなんぜホントはきんだヨネ。テクニック、サウンドの特徴としてはスピード感が最高。とび早弾きの中にアームをうまく入れ、ワウペダルも効果的。リアーピックアップを多用し、腰のあるディストーションサウンドがGOOD。酒のみたいい、何だか泣のフレーズが予測できちゃう位、アー他人と思えない。



⑨M・T風トロピカルサウンドに挑戦

日本人のギタリストとしてヤングのギターフリークに最低もっとも影響をあたえたし、レコードのセールスも抜群。エフェクターの使いかが独特でうまく隠りなくひかがスペシーサウンド。でもほいサウンドを出すテクニックは最高。フレーズ"もどこが日本人ばなれしているところが逆に日本人的だったりして？ ちっと日本人が日本人のアーティストを？ おってのは難しいからこの辺で。ハムバッキングよりもクセがなくエフェクターのかかりが優れているシングルコイルのSTモデルの方がよりセクシーだネ。



⑩小川銀次

最後に自分のコマーシャル。現在「クロスウインド」のニューアルバムの制作に入っていて今年はとにかく頑張りたいと思っています。レコードがリースされたらヨロシク。で、これは宣伝ネ？ つもりはないんだけど、TA-35・OCを2台ステレオで面白い分割してみようってことで、同じトーカイの VS 100 プロトタイプとのコンビでレコーディングも何曲かしてみようと思っている。ボクの場合、サウンド創りにこっていりからエフェクターのかかりがいい、つまりナマ音がきれいなアンプが好きなんだヨネ。で丁度よかったと思っていると、ギターもフランクフルトショーに行きたくなったヤツとかで、トラモでもバッチリだし、サウンド、使い易さ共に満足と気に入って現在メインで使っている。またみんなと何処かで会うかもしれないけど、その時はヨロシク！ レコードもヨロシク！

こいがウワサのリトルジャイアンツ